

ここに示された原則の1)および2)が、有坂氏の「音節結合の法則」(第1および第2則)にほぼ該当するものであることは言うまでもなからう。ただし、原則2)と有坂氏の「第2則」とは大体一致するものであるが、原則1)は氏の「第1則」(「 o_1 と o_2 は共存しない」と必ずしも同じでない。なぜなら、原則1)は「CoCoにおいて o_1 は現れない」ということを意味しているからである。

3)~4)の原則は、これらの音節構造においては、ある場合には o_2 、ある場合には o_1 が現れ、要するに、その現れ方が定まらないということの意味する。これについて詳しくは後に個々の例証について検討しなければならないが、概略的にいうと、 o_2 の現れる場合の方が多く、 o_1 が現れるのはかなり限られていると言える。ただ、それがいかなる条件によっているかを明確な形で定義することは難しい。ここに現れた現象は、「上代特殊仮名遣」の中でも最も厄介な性質のものである。

そこでこの場合はひとまず留保して、1)および2)に関して言えば、ここに現れた o_2 と o_1 の関係はかなりはっきりしている。それは次のように言い表せよう。すなわち、

「 o_2 と o_1 は同じaの交替母音oの異なった音節構造における異なった表記上の現れである」。

たとえば、pasa〔挾〕~poso₂〔細〕における o_2 とkura〔暗〕~kuro₁〔黒〕における o_1 は、aの交替母音という関係においては、ama~ame₂〔天・雨〕における e_2 とtuma~tume₂〔瓜〕における e_2 の場合と同じように、少なくとも通時的、ないし「形態音韻的」観点からは、「同一の」実体であると言わなければならない。さらにまた、両者の現れ方が、音節構造という音声的条件に依存するという点で、少なくともこの部分にかぎり、共時論的には、同一音素の結合変異ないし「(変)異音」(allophone)という関係でとらえることもできよう。

o_2 、 o_1 のこのような関係を最も明瞭に示すのは次のような場合である。その第一は、CaCaの交替形CoCoにおける第一音節がある二次的要因によってCo→Cuのごとく変化する場合である。たとえば、waka〔若〕の交替形woko〔愚〕は、wo→(w)uという変化によって(w)ukoという形をとることがある。この両形に含まれる・koが形態論的にも音韻論的にも同一の実体であることは疑問の余地がない。にもかかわらず、前者では乙類表記、すなわちwoko₂<袁許>(記応神)、後者では甲類表記、すなわちuko₁<于古>(応神紀)となって現れる⁴⁾。

第二は、これと丁度逆の場合で、CuCaの交替形CuCoがやはり二次的な変化によってCoCoという形をとる場合である。前者における甲類表記Co₁は、後者の音節構造においていわば“自動的に”乙類表記Co₂として現れる。たとえば、muko₁〔對手・智〕(muka〔向・対〕のo交替形)→moko₂-ro〔若・如〕<母許呂>(万196)、<毛呂>(万3527)、muro₁〔室・屯〕(mura〔群・叢〕o交替形)→mi-moro₂〔杜・神社〕<美母呂>(記雄略)、pi-moro₂-ki₂〔神籬〕<紐呂寸>(万2657)のごとくである。同様に、kuma〔隈・隠〕に対するko₂mo-ru〔隠〕<許母>(万4283)、tuma〔伴侶〕に対するto₂mo〔伴〕<登母>(記神武)、a-tuma-〔集〕に対するa-do₂mo-pu〔率〕<安騰毛比>(万199)等も、CuCo→CoCoという形の二次的変異形と見なすことが可能である。

このように、CoCoの音節構造は o_2 の、CuCoのそれは o_1 の現れる最も特徴的かつ安定的な環境であると言うことができる。それ以外の音節構造において o_1 、 o_2 がどのように現れるかは、次に取り上げるa~o交替の実際例について、もっと詳しく観察して見る必要がある。

4) 同様の例は、kara〔幹・休〕の交替形ko₂ro₂〔自身、身体〕に対するmu-kuro〔身体〕(後出)にも認められる。mu-kuroの仮名表記例は上代文献に見出されないけれども、もしこの語が仮名表記されたならば、その-roは確実に甲類表記で現れるであろう。